

やすらぎ



「歎異抄」 第十六章 続き

一切の事に、あしたゆうべに回心して、往生をとげそうろうべくは、ひとのいのちは、いずるいき、いらいきをまたずしておわることなれば、回心もせず、柔和忍辱のおもいにも住せざらんさきにいのちつきば、撰取不捨の誓願は、むなしくならせおわしますべきにや。くちには願力をたのみたてまつるといいて、ころには、さこそ悪人をたすけんという願、不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまわんずれとおもうほどに、願力をうたがい、他力をたのみまいらすところかけて、辺地の生をうけんこと、もつともなげきおもいたまうべきことなり。

(真宗聖典六三七頁)

「歎異抄」(第四十回)

標 暁 講述

専ら念仏して、弥陀の本願を究極の依り処として生きる、我々真宗の念仏者においては、如来の本願力によって、息詰まらない生活ができる。

日常生活の中で、腹を立てては反省し、よく怒っては反省し、いつでも反省しているようなことを回心であるならば、いつ、私のいのちが終わるかわからないのに、悪い心が起きた時に、すぐ死んでしまったら、もう回心しないということになる。

ここで云われている呼吸は、まず、いずるいき、吐く方が先で、いらいき、吸うのが後である。我々は、吸って吐いているので、これは吸呼になる。吐けば肺が空になるので、ちゃんと吸うことができる。しかし、吐いた息が吸い込めなくなるのが、死ぬということ。死ぬということとは、息が絶えること。

大体我々は、瞋恚の煩惱が具わっているから、すぐに腹を立てる。腹を立

光照寺寺報

発行所
真宗大谷派 弘興山
宗教法人光照寺

〒331-0821
さいたま市北区别所町102-2

電話：048-651-2781代

FAX：048-651-2753

E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp

ホームページ

http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji

発行人 池田孝郎

てること自体が、もはやこれ仏法に反することである。如来をたのんでいない。そんな状態で死んでしまったら、撰取不捨の誓願は無意味なものになってしまうのではないか。

いつも反省して、良心のはたらきを依り処としているのは、いかにも立派なようであるけれども、反省ができない場合は、仏の本願が無意味なものになってしまうではないか。そのようなことは絶対にありません。

如来の本願を依り処として生かさせていただくのが、浄土真宗の門徒だと、人には口でそう云いながらも、本当はやつぱり善い心を起こしたものをたすけられるのであらうと思ってしまうのである。そういう具合に思ってしまうのは、それは、本願を疑い、他力をたのみまいらすところが欠けている。

念仏一つだけれども、信心の一番大事なところが欠けてしまっているために、浄土の真実の世界ではなく、方便の浄土にしか生まれられない。これは、

真宗の門徒として、最も哀しむべきことではないか。

信心が欠けて、反省だけで生きるという生き方しか知らずに、念仏しているというのは、最も哀しいことなのです、とはつきり云われている。

我々の常識とは、善悪の世界での常識の価値観である。常識と信心とはちがう。反省と回心とはちがう。反省しても、また同じ心を起こす。私は回心しているかどうか、これがテーマである。(当寺)「法話抜粋要約、文責副住職釈徹照」次回へ続く



お寺桜前にて



花まつり本堂にて

孟蘭盆会法要 子供会報告

八月十日(日)

厳修

詳細は三頁
詳細は三頁

光 碍 無

一凡夫が仏になる法一

住職 池田 孝郎

この度は、「ビットコイン」の大手取引サイト運営会社が経営破綻したとするニュースを知り、価値とは何か。そして、価値の交換とは何かについて考えてみたいと思いました。

まず「価値」とは何にかについて考えてみると「財とサービスの付加価値」と定義して来る、今日の「G・D・P」(国内総生産)で、国内はもとより世界経済が動いている事実です。それに基づいて通貨の価値、供給量等が変動し経済が成り立っているのでしょう。

経済とは「経世済民」を語源に持ちますが、本当に世の民を救済

しているのでしょうか疑問です。原始社会は「物々交換」であったものが「貨幣」の発明によって、価値の媒介物として発展して来た今日です。ある時代は、「米」等の価値を標準とし、又、「金本位」とし、あるいは金と交換出来る「兌換紙幣」となり、「紙幣」から、「キャッシュレス」として、「カード」とか「電子マネー」時代へと突入して来た時代を迎えています。

歴史を尋ねれば、時の為政者が「度量衡」を決定し、価値を量る単位として通用させて来たものであり、それが今日はグローバル経済となり、ドル、ユーロ、円、その他の国の通貨で決済されて国際経済は動いている。まさしく「バーチャル化」の様に「一喜一憂」している現状です。

今日の価値は「需要と供給」によつて変動しているものです。そして、信用と保障によつて保たれている仕組みの経済社会です。しかし、一端、国とか企業が破綻すれば、通貨や信用は皆無に等しくなる危険性も孕むものです。

古典経済学としての、アダム・スミスの「国富論」の「キーワード」は「神の見えざる手」に委ねるものでした。それからの資本主義は貧富の格差を生み、ポスト資本主義(資本主義にかわる新しい

経済)が叫ばれても先は見えません。ものの価値と交換の豊かさとは何んでありましようか。

人間は常に「はかる」存在と認識します。その「はかる」事によつて、「基準」、「標準」、「価値」を変えながら「進歩発展」して来た「文明」であり、「文化」を形成して来たものでしょう。しかし、絶対なものではなく、普遍的な正統なるものは今だ得られていません。

それはどういう事を考えますと、「人間の自我」(人間のエゴ)に帰着します。人間の欲望は際限なく、果てしなく拡大し追求して止むことを知りません。それは皆「はかる」世界であります。「はかり」ながら苦しむ存在といえますよう。

それでは「はからない世界」を人類は求め、発見して来たのでしょうか。勿論 発見し、伝えて来ております。それがお釈迦様の仏法です。その発見の法が「アミーター」です。「限りなき光、限りなきいのち」を覚られました。

この世は「諸行無常、是生滅法」です。覺りの世界は「生滅滅已寂滅為樂」です。この「現生」に覺りの世界が今、あなたに、否、一切に用いていると感得し伝えた方が親鸞聖人です。混迷の世に如来大悲の光を感得せんことを。合掌

真の依り処

世の中義務だルールだ規範にと氣を取られている自分がいます。それ故、物事の優先順位がなかなかうまくいかない事ばかり。まず自分が満たされてはじめて他を満たすことが出来ると思うのです。煩惱にふりまわされている自分勝手であろうにもならない卑怯者のこの私を可哀想と思つて下さる親様が私のそばにいつもいらつしやいます。時には夢中に飛び廻つて居る時私の心に余裕がない為、忘れてしまつて居る業が深い私を悲しみながら照らして下さいますので、懺悔と感謝のお念佛申しかない私です。

曾我量深先生は「機の深信は宿業の自覺それを深信する。宿業の自覺に随順する」と、述べておられます。罪惡深量で煩惱具足のこの身にひびきます。南無阿彌陀佛

岡田ノリ子

鈴の音

氣に入らん人がおたら、こっちに自我があるということを証明してくれる仏さんである

米沢英雄
(「本願はいのちなり」)

盂蘭盆会法要

- ・ 8月10日 (日)
- 第一部 (午前) 9時30分受付
午前10時～11時30分まで
- 第二部 (午後) 1時受付
午後1時30分～3時30分まで
- ・ 光照寺本堂にて
- ・ 勤行・法話
- ※準備の都合上、出席人数と午前か午後
の参詣をご連絡下さい。預骨、初盆の方は
率先してお参り下さい。また、どなたでも
お参りできます。真宗のお盆に触れて下
さい。ご参詣をお待ちしています。

お盆参り

- ・ 7月13日から16日の期間
- ・ 8月1日から16日の期間
(10日は除く)

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。
時間につきましては、こちらで調整して
ご連絡させて頂きます。ご自宅か当寺のい
ずれかで読経いたします。

お盆



お盆用のグッズがお店の店頭に並
びはじめる、お盆の季節が来たな
と思うと同時に、浄土真宗ではま
たく不要なものが販売されるなど
うものです。

商業戦略に乗ると、当たり前
のようには思えないが、ちがいが、
むしろ仏教とは何かを理解されて
くるとお盆グッズのほとんどは不要
になります。

以前にご門徒さんが仰っていたのは
「亡き人を諸仏として仰ぎ、亡き人
のいのちの願いを生きている人は聞き
取って、いのち目覚める場がお盆とい
うのはよく分かりましたが、ナスやき
ゆり、白木の提灯を用意しないと何
となくお盆を迎えた感じがしない。」
(先祖もやっていたし...)ということ
です。

慣習の根の深さを知らされました
が、慣習から脱却するのも勇気がい
るでしょうし、僧侶も慣習の根深さ
と向き合うのも根気がいります。

いずれにしてもお盆は宗派の教え
や特性が反映された機会だと思いま
す。お盆とは何か？から一緒に仏法
に触れる機会にしたいものです。

亡き人を偲び、ご一緒に念仏申し
ましょう。

お盆法要は一部制にて厳修致します。
多数のご参詣をお待ちしております。

副住職 (釈 徹照)

子供会報告

子供会「ポニークラブ」
花まつり&いちご狩り

スタッフ 大塚 陽子

四月一日(火) 小人十名 大人十二名
の参加を得て、本堂にて勤行、自己紹介、
坊守あいさつの後、花御堂の誕生佛に、
お釈迦様の誕生のお祝い、子供達の健
やかな成長を願い、甘茶をかけました。
甘茶も皆さんで頂きました。法話の後、
光照寺南側の境内地にて、満開の桜の下
で写真撮影、移動して、いちご狩りをし
ました。皆さん三十分でたくさんのおい
しさを頂きました。その後、花の
丘公園にて、昼食をとりました。天候に
恵まれ、桜も満開で、絶好のお花見日和
となりました。子供達も青空の下、元氣
に遊びました。光照寺に戻って、恩徳讀
で閉会しました。お手伝い下さった役員
さん誠に有り難うございました。



いちご狩り



甘茶かけ



自己紹介

ひとくち 歎異抄

羅漢：われわれの存在は如何に。
「煩悩具足の凡夫とおおせられた
ること。」第9章



「われらは煩悩具足の愚かな存在
であると仏は示され、われらのため
に本願を建て救うと誓われた」。

川越喜多院の五百羅漢

お知らせ

— 寺務所より —

●敬告

●小刀称ゆり子様(護持会庶務)、「平成二六年二月十二日命終 七五歳」が浄土へ還帰されました。生前のご功勞を偲び、念仏合掌して哀悼の意を表します。

●法要のご案内

●五箇盆会法要

八月十日(日)、午前・午後二部厳修。

●秋季彼岸会法要

九月二十三日(火) 午後二時三十分より厳修。

●報恩講

十月二十六日(日) 午前十二時より厳修。

●光照寺護持会総会

六月二十九日(日) アトラクションあり。

●光照寺旅行

十月四日・六日、九州方面へ二泊を予定。

●聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会
樸先生が療養中の為、日程は決まり次第ご案内致します。

●大経の会

七月五日、九月十五日、十月十一日、午前十時〜午後三時まで。細川巖著正信偈讃仰(四)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

七月十六日、九月十一日、十月十六日、午後一時〜四時まで。「真宗の簡要」(住職著、サプテキスト「無量寿経に聞く」(松原祐著)を学んでいます。講師は住職。

●微風学舎

毎月開催。午後七時〜九時まで。講師は

副住職。「顕浄土」の教学・親鸞における現生不退の視座・サプテキスト「今日のことは」「真宗の生活」を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

●さいたま親鸞講座

午後一時〜四時まで。会場は大宮川鍋ビル。八月九日、十月十一日、十二月十三日、講師は四衢亮氏。

俳句・川柳

吉澤 光昭

乙女等の項清しく街薄暑
緑蔭の棋士長考の一手かな
短夜や始発のベルの聞えきて

西木 順子

新緑のまぶしかりしよころ病み
散骨でお願いしす花蒲公英
二輪草気憶はあてにならざりし
花まつり

江部 鴨村

墨染めの御衣華や花まつり
目借時草取る鎌の遊びぐせ
ゴッホの筆もう止まらない麦の秋
葱坊主浅間山は雲を生むところ
人形師たましひ入る柿若葉
思惟仏にひとつ揺れるる葦の角
半眼の仏の視野に蟻地獄
春愁や釘打つ石の重きこと

山田 恒

【光】
妻の住む瞬く星に生かされる
【回る】
古希越えて地球が早く回りだす

釈 義深

良き人を慕いて集う一周忌
老妻の明るき顔が浄土かな
良き人の人柄偲ぶ遺稿集

短歌(詩)



おひな様

佐藤 セツ子

ひっそりと箱の中にて休み居し女雛の
顔のふいにやめく
若き日に吾の造りしお雛様裳裾を曳き
て凜と立ち居る

受験の年と聞きておりしが遠く住む女
孫らは雛を飾りたりしや
戦後には食料品と交換され雛はアメリカへ
送られしとぞ

大寿雛造りし時のむずかしさ秘めて裳
裾の襲美し

赤秀 品枝

咲き分けの梅林を巡りおる旧友の死の
知らせを受けて
五月晴れ気持ちいいねと背伸びして笑っ
て泣いて深まる絆

亡き子七回忌に寄せて 河野 日出子
淡紅の桜花びら花筏修行浄土に早七と
せや

仏僧の読経の声の極りて虚しき胸に怒
濤の如く
「お母さん」今にも肩に触れそうな黒縁
写真の君の微笑み

墓前にて望む山々春霞燦る煙に仏花の
香り
夫婦して次のお迎え問いかけむ「まだ
まだ早いよ」亡き子慌て、言いたげな
長閑な春の午後のこと

合掌
篠原 潤子
「あえて言えば浄土真宗」われにむけ答
えて下さるやなせたかし師

親鸞さまを
四十才手に出合ったお念仏南無阿弥
陀仏み手のまん中

喜べる悪妻愚母のわれひとり凡聖逆
勝齊廻り知る
あえぎつつどうにでもしてくれとなる
我でも口に南無阿弥陀仏

我でも口に南無阿弥陀仏

梵鐘



山田 邦興 画

私は二十歳で小学校教師にな
った。島根県で二校、東京都で
六校勤務した。下宿屋を五軒か
わり、三十一歳で自宅を持った。
その間南無阿弥陀仏の名号を壁
に掛けて勤行を続けてきた。八
十四歳の今も続けている。「この
家の主人は仏壇の名号である」
との言葉がいつの間にかうなづ
けるようになった。勤行も無理
なく出来るようになった。継続
の大切さを感じる。

もう一つは苦しい問題が私の
身にも家族の身にも次々とおこ
つてくることである。「問題は常
に内にある」「これが私の取り
組むべき現実である」「この教え
に勇気をもらって生きている。

(玄吾)